２０２３年5月7日　Ｎｏ.３６６６　週報上掲載

先週の講壇から　　〝人生の糧〟

イザヤ書 第55章6節～11節

聖句「わたしの言葉も／むなしくは、わたしのもとに戻らない。／それはわたしの望むことを成し遂げ／わたしが与えた使命を必ず果たす。」(55:11)

１．《記憶と思い出》　年齢を重ねると共に記憶力は確実に減退します。「最近、物忘れが酷くなって…」と心配になるのは、誰もが経験することです。昨日今日のことは忘れてしまうのに、大昔の事が鮮やかに蘇って来るから不思議です。記憶と思い出とは違うのかも知れません。英語では２つ共「メモリー」ですが、私たちは、強く心が動かされて心の奥底に納められている事柄を「思い出」と呼んで、単なるデータの集積である「記憶」とは区別して来たのです。

２．《御言葉の糧》　キリスト者は与えられた聖書の御言葉を「糧」と言い習わして来ました。聖書の教えを「糧／食べ物」に譬えて来たことに信仰の奥義があるのです。何日も前の食事のメニューやカロリー量を覚えている人はいません。しかし、その食事は確実に私たちの心身を養って来たのです。同じように、聖書の御言葉や教えも事細かい解釈や意味までは記憶していませんが、それは身についていくものです。聖句を暗記しているかどうか、上手に祈れるかどうか、信仰に熱心かどうか等は取るに足らないことなのです。クリスチャンとしてのセンスがあるか否かは、咄嗟の時に自ずと出て来るのです。長年、真摯に教会生活を続けて来られた人は、それが自然と出て来る。自然と出て来るのは身についているからです。

３．《体験と経験》　ご飯は毎日食べる日常の積み重ねですが、私たちは、その積み重ねの上に生きています。同じリズムの積み重ねがエネルギーを持つのです。解剖学者の養老孟司が随筆に「体験と経験は違う」と書いて居られました。私たちは、特別な体験を重視する傾向がありますが、どんなに強烈な体験も時間と共に風化するし、他者に伝えるのは難しい個人的なものです。しかし、経験は経験則と成って積み重ねられて、他の人（後世の人）の役に立って行くのです。毎週の礼拝を守って何十年、「教会暦」を通して、主の降誕、受難と復活、昇天と聖霊降臨、主の御生涯を辿りながら、自らの人生を重ねているのです。

朝日研一朗牧師